HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌ社会における和人のアイヌ性 : 和人妻と和人夫
Author(s)	小野寺, 理佳
Description	第6章
Relation	現代アイヌの生活の歩みと意識の変容 : 2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書. 小山透編著
Citation	北海道アイヌ民族生活実態調査報告 : Ainu Report, その2, 123-142
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/48977
Type	departmental bulletin paper
File Information	AINUrep02_008.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第６章　アイヌ社会における和人のアイヌ性
――和人妻と和人夫――

小野寺理佳

名寄市立大学保健福祉学部教授

はじめに

本章では、アイヌ民族と結婚した和人配偶者のアイヌ性を探る。その場合、「和人のアイヌ性」を、アイヌ社会における和人配偶者が、どのくらいアイヌ社会に受け入れられ、どのくらいアイヌ社会に順応し、どのくらいアイヌとしてのアイデンティティを共有しているのか、即ち、アイヌ社会において和人配偶者が獲得した立ち位置と理解する。考察の手順としては、和人がアイヌ民族と結婚するまでの経緯をみたうえで、結婚後の和人配偶者が子育てを通じてアイヌ社会との関わりを深めていく過程をとらえ、和人ならではの立場からアイヌ民族を受けとめていく様子を確認する。和人配偶者の性別によるアイヌ性の違いにも注目する。

第１節　和人配偶者の属性

本章で取り上げるのは、和人配偶者（元配偶者を含む）15 人（和人妻 12 人、和人夫３人）である[1)]。ただし、対象者自身が和人配偶者であるのは 15 ケースであるが、調査対象者のなかにはこの他に「和人夫をもつアイヌ妻」が 30 人、「和人妻をもつアイヌ夫」が 31 人いる。彼らの語りのなかに、アイヌ配偶者の立場からみた和人配偶者のアイヌ性のありようを見出すことができる場合もあるため、該当部分を抜粋した表も作成した。

はじめに、この 15 人の年齢、家族構成、配偶者のアイヌの血筋について概観する（表６－１）。和人妻は青年層から老年層、和人夫は壮年層から老年層に属しており、最年長者と最年少者の間には親子あるいはそれ以上の開きがある。家族構成と同居家族は年代に応じて変化するため、その点についても多様であることはいうまでもない。このうち、配偶者との死別経験者は老年層の和人妻２人、離別経験者は壮年層・老年層の和人妻７人である。離別経験者は和人妻の 58.3% という高率である。離死別後に新しいパートナーを得た３ケースを除くと、現在、配偶者をもたない者は５人である。ただし、独居は老年層の１人のみであり、他４人は子世代一家あるいは未成年の子ども、祖父母世代との同居である。アイヌ配偶者（あるいは元配偶者）の血筋をみると、父母（養父母含む）のいずれかが和人である者が約半数（７人）である。祖父母世代まで含めると和人との通婚率はさらに上がり、父方母方三世代の全員がアイヌの血筋であるようなケースはむしろ珍しいといえよう。つまり、ここで取り上げるのは、徐々にアイヌの人々と和人との婚姻が増えつつあるなかでの結婚であり、そうした状況におけるアイヌ性ということになる。

次いで、学歴、現在の職業、年収について確認する（表６－２）。一般に、年代が若くなるに従って高学歴化する傾向がいわれるが、この 15 人についても全体としてはそうした傾向が認められる。しかし、世代間の学歴差はそれほど大きなものではない点が注目されよう。つまり、若い世代において、短大・大学以上の高等教育進学者が僅かしかいないのである。この教育達成の低さは和

人妻において顕著である。その理由として、和人妻が育った教育環境、経済環境がそれほど恵まれたものではなかったことが考えられる。環境として教育の必要性への理解が十分ではないために、本人において勉学への親和的な態度が身につかず、また、教育資金の準備が十分になされないために進学を実現させることができなかったのではないだろうか。教育歴は職業選択を大きく規定するため、本人の現在の職業をみると、ホワイトカラーに分類される職業に就く者はおらず、ほとんどが非正規就業である。なおかつ、離別経験者に顕著であるように、転居を理由とするものを含めての転職が多く、同じ職場での長期の就業者は少ない。したがって、年収も決して高いとはいえない状況にある。

表６－１　年齢・家族構成・アイヌの血筋

	世代	離死別	同居家族〈他出家族〉	アイヌの血筋（ア＝アイヌ、和＝和人）（曾祖父母の代まで・不明は除く）
和人妻	老年	死	子1・孫1〈子2〉	夫母＝ア
		離	独居〈子4〉	元夫父＝ア、元夫母＝和
		死(離)	同居人1〈子3〉	夫母＝ア、夫父＝和
		(離)	夫・子1・義父	夫父・父方祖父＝ア、夫父方祖母＝和、夫母方祖父母＝和
		(離)	夫・子1	夫母・夫養父方すべて＝ア
	壮青年	離	子1人一家〈子1〉	元夫方すべて＝ア
		—	夫・子2	夫父＝ア
		離	子1〈子3〉	元夫父方・元夫父方祖父・元夫父方曾祖父＝ア、元夫母・元夫父方祖母＝和
		離	母・子2	元夫父・父方祖父・父方祖父両親＝ア、元夫父方祖母・父方祖母両親＝和
		—	夫・子1〈義母・子1〉	夫父母・夫父方祖父＝ア
		—	夫・子3	夫父＝ア、夫母＝和
		—	夫・子5	夫父・夫父方祖母＝ア、夫母＝和
和人夫	老壮年	—	妻・子1〈子2〉	妻母方すべて＝ア、妻父＝和
		—	妻・子2〈子2〉	妻父・父方祖父母＝ア、妻母＝和
		—	妻・子3・孫1	妻父母・妻母方祖父母・父方祖母＝ア

注）1.壮青年は青年層（20～30歳代）＋壮年層（40～50歳代）、老壮年は壮年層＋老年層（60～70歳代）
　　2.離死別：配偶者との離死別（括弧付きは現在配偶者有り）

第２節　アイヌとの結婚を促す生活状況

和人配偶者の出生から結婚までの生活に関して、とくに、アイヌの人々との婚姻を促すことになったと思われる生活状況、生活条件を探るならば、２点指摘することができよう。１点目は、アイヌの人々と地理的に近いところで暮らした経験をもつこと、２点目は、教育水準や就労状況がアイヌの人々と共通していることである。

まず１点目についてみてみよう。和人配偶者の出生地や居住歴を一覧すると、ひとりを除いた全員が北海道出身者であり、さらに、アイヌの人々が多く居住する地域やその近隣に暮らした者が９人いる。いずれも､父親の職業上の必要に応じての居住や転居への帯同である。穂別村で農業（２人）、別海町で離農後鵡川に移り建設会社、稚内市から門別町富川へ転居して牧場の仕事、平取町で営林署勤務、穂別町で林業関係の会社経営などがある。こうしてみると、和人がアイヌの人々との結婚に至る背景のひとつとして、共通の環境で育ったという身体的な親近感のようなものがあると思われる。そうした感覚は必ずしも本人に明確に自覚されているとは限らないが、潜在的な効果は大きいだろう。アイヌの人々との地理的な距離の近さは、彼らと日常的に行き交い、彼

らのおこなう様々な行事を見聞きし、場合によっては彼らと交流をもつ機会をより多く提供する。実際、子どもの頃あるいは結婚する以前のアイヌ民族との交流のありようやアイヌ民族に対する印象を問うと、近隣に住むアイヌとの親しい交流が思い出としてあげられる。たとえば、年配の女性たちのところで「赤いきれや黒いきれを入れて編んだりして、それを見たりいたずらしたり」して遊んだこと、食べ物に困っている人々には「お米を隠してもっていったりしたので、おばあちゃん達に可愛がられた」こと（和人妻・老年）、また、長屋の隣に住む年配女性が「口に入れ墨をして」おり「その顔がすごくおっかないイメージ」だったが、「普通に話をしたり」「家に遊びに行ったりしていた」こと（和人妻・壮青年）などである。

だが、これ以上に両者の親密性を深めることに貢献しているのが、地域の学校においてクラスメートとして共に過ごすという経験である。学校での交友関係については、「クラスにアイヌは３分の１はいた。…同級生にアイヌはいたし、アイヌの友達もいた。アイヌは特別ではなく普通に学校の友達として接していた」（和人妻・壮青年）、「学校でもアイヌかどうかなど意識せず、普通に一緒に遊んだ。男の子も女の子も仲がよかった」（和人妻・壮青年）、「学校ではアイヌも和人も一緒のクラスで、特別アイヌを意識するようなことはなかった。むしろ、その頃とくに仲の良かった「親友」は和人でなくアイヌの人たちであった」（和人夫・老壮年）、「小学校の頃は友達にアイヌの人は多かったし、中学校になると、他のアイヌの多い部落からも集まってくるので、アイヌの同級生の割合は増えた。高校のときはほとんど仲のいい友達はアイヌだった。アイヌとは普通に仲良く付き合っていた」（和人夫・老壮年）など、数多くの思い出が語られている。

このとき、アイヌの人々の動静や評判、とくに、彼らに対する大人たちの差別的な態度を知ることによって、当時子どもであった和人配偶者はアイヌ民族差別の存在に気づいてはいる。「両親はアイヌをとても嫌っていた。自分の前では口に出さなかったが、アイヌの身なりや生活環境からアイヌを嫌っていたというのはわかった」（和人妻・壮青年）、「アイヌの三原則「汚い、臭い、ずるい」というのをアイヌのおじちゃんが言っていた。お酒の席でだらしないことを誰かがすると「だからお前アイヌと言われるんだ」とアイヌの中で言われているのを聞いた」（和人妻･壮青年）、「小学校３年生で鵡川に来てから、アイヌという人達がいるのだということや差別の対象になっているということを子どもながらに無意識のうちに意識していたかもしれない」（和人夫・老壮年）といった言葉が聞かれた。それでも、「自分自身は差別感を持って接したことはない」（和人夫･老壮年）と語り、和人配偶者自身にはアイヌの人々に対する特段の悪印象はもたれていなかったと思われる。

次いで、２点目について。父親の職業･職歴（農家、漁師、電気系技術者、建設作業員、魚の仲買人、牧場従業員、営林署署員など）から推測する限り、和人配偶者の育った家庭がエリート層の経済的に豊かな家庭であったとは考えにくい。「アイヌ以上に貧乏してきた」（和人妻・老年）という言葉も聞かれる。しかし、中学卒業時の暮らし向きを問うと、「貧乏」「貧しかった」という回答は上記のものを含めた３例だけであり、むしろ「生活に困らない」という趣旨の回答の方が多い。「父親は会社員なので苦労もなく裕福に生活していた」（和人妻・老年）、「父が公務員だったのでお金に困る生活ではなかった」（和人妻・壮青年）、「親が会社をやっていたので、子どもの頃はそんなに貧しい思いをしたことがない」（和人妻・壮青年）といった内容である。ところが、それにもかかわらず、和人配偶者の教育達成は全体に低調である。一般に、経済格差が教育格差に直結すると

いわれるが、この場合は、家庭の経済状況がとくに厳しくなくても教育達成が高まる傾向はみられない。先述の通り、彼らの最終学歴は高くなく（表６－２）、就労は不安定な状況である。つまり、ひとところで安定的に働いてきた者は少ないのである。典型例として、「理容師見習、列車清掃、マネキン、洗濯工場、バス清掃、デパート清掃」（和人妻・老年）、「ホテル、釣り道具屋、ホテル電話交換手、喫茶店、チラシ配り、スポーツセンター厨房、ビルのメンテナンス、地下鉄駅清掃、ホテル浴場管理パート」（和人妻・老年）といった職歴があげられる。

表６－２　学歴・職業・年収

	世代	最終学歴	最終学歴(配偶者)	現在の職業	現在の職業（配偶者）	年収
和人妻	老年	高等小学校	—	無職（年金生活）	死別	100～200万円
		中学	—	無職（年金生活）	離別	80万円くらい
		中学	—	無職（年金生活）	—	100万円ちょっと
		高校	—	専業主婦	建設会社（正規雇用）	300万円くらい
		高校	—	パート	便利屋	100万円未満
	壮青年	高校	—	看護助手	離別	300万くらい
		高校	高校	専業主婦	印刷会社	400万円前後
		高校	—	パート	離別	200～300万円
		高校（中退）	—	パート	離別	100万円未満 母親の収入との合計は 100～200万円
		中学	—	アルバイト	土木作業の季節労働者	100万未満（妻） 夫の収入との合計は 300～400万円
		専門学校（中退）	高校	通信関係会社	林業（妻の実家の会社）	100～200万（妻） 夫は300～400万か 400～500万円
		高校（通信）	—	専業主婦	夫父経営の解体業の会社	300～400万円
和人夫	老壮年	大学	小学校(?)	無職（年金生活）	無職（年金生活）	300～400万円
		大学	—	農業	主婦	200～300万円
		高校	高校	ガス販売店の正社員	ゴミ収集のパート	400万円（夫） 妻は100万未満

そこで、学校生活の様子や進学断念の理由をみると、勉学への親和性の低さが目立つ。「理容師の学校に行こうと思っても頭が悪くて入れなかったので」（和人妻・老年）、「進学したい気持ちがなく就職した」（和人妻・壮青年）、「全然勉強したい気持ちはなかった」（和人妻・壮青年）というように、自分の能力についての諦めや勉学への忌避感が語られている。ここから推察できることは、和人配偶者の育った生活環境は、家庭の経済的な安定度に比して教育環境としてはそれほど整っていなかったのではないか、ということである。親世代は、意図的ではなかったにせよ、子どもの教育についてそれほど熱心ではなく、学校の環境もまた子どもの勉学意欲を高め、励まし、後押しするような場所ではなかったことが考えられる。「親は進学のことなど教えてくれたり、大学へ行きなさいとか資格持ちなさいとか言ったりするわけでもなく、教育的には何をやってよいかわからないような親で、自分はただ育てられたような状態」（和人夫・老壮年）という言葉があるが、これと似た状況があったのではないだろうか。彼らの教育歴の不十分さと就労の不安定さはその結果と言えるだろう。したがって、和人配偶者においては、教育や就労の点でアイヌの人々との共通性が高いことが、彼らとの結婚をより容易に実現させたという側面もあったと思われる。

第３節　結婚をめぐる賛否

では、和人は具体的にどのような経緯でアイヌの人々と結婚することになったのだろうか（表６－３）。初婚の年齢は 17 ～ 19 歳が３人、20 ～ 24 歳が６人、25 ～ 29 歳が２人、30 歳が１人、不明が３人である。出会った場所や付き合いが深まったきっかけの主なものは２つある。ひとつは、職場の同僚あるいは取引先として親しくなったケース（和人妻・老年３人、和人妻・壮青年３人）、もうひとつは、学校の同級生と再会したケース（和人妻･壮青年２人、和人夫･老壮年１人）である。最年長の和人妻だけは、結婚が自分の意志ではなく父親の選択に従ったものであると述べているが、その他の者は相手に対する愛情を自覚して自分で結婚を決意している。

結婚に際して、相手がアイヌ民族であることを知っていたのは 15 人中 11 人である。アイヌ民族であるという事実については、「別に気にならなかった」（和人妻・老年）、「好きになって結婚したので、夫がアイヌであることは気にしなかった」（和人妻・壮青年）というように、「愛情ゆえに拘らない」という回答が多い。さらに、若い世代のメンタリティには、アイヌ民族についての無知・無関心からくるある種の「無頓着さ」が加わっているように思われる。「特別視しない」というのではなく、「どっちでもよい」というスタンスである。「アイヌというもの自体を知らなかったし、血筋は関係ないと言って結婚した」（和人妻・壮青年）という言葉にはそうした無頓着さが感じられる。

このように、和人配偶者本人においては、アイヌ配偶者が自然に受け入れられているのに対して、周囲の反応はもう少し複雑である。結婚時の家族・親族の態度を問うと、はっきりと反対された経験をもつ者は７人である。この場合、結婚に反対したのはすべて和人配偶者の親である。反対の理由は、結婚相手個人の人柄や資質に関することではなく、１件（和人妻の方が 14 歳年長（和人妻･老年））を除いては、民族的な差別意識によるものである。具体的には、「母親は夫がアイヌだということで結婚することにすごく否定的で、北海道に結婚式に来てから、「結婚するのをやめなさい」「もう、このまま帰ろう」と言われた」（和人妻･壮青年）、「夫がアイヌなので両親に反対された。父親はすぐにあきらめたが、母親には結婚式をあげる前日まで（対象者が）ノイローゼになるのではないかと思うくらいずっと泣かれた」（和人妻・壮青年）、「自分の家族はアイヌ民族との結婚に猛反対で、父親が結婚をさせないようにいろいろ手を打ってきた」（和人夫・老壮年）、「母親に妻がアイヌなので結婚してほしくないということは言われた」（和人夫・老壮年）など強硬な反対にあっている。また、道外出身の和人妻が、「距離が遠すぎる」という理由で反対されたことについて、「本心としてはアイヌだということでは」と認識しているように、あからさまな差別感情が示されないとしても、積極的な賛成を得ることは難しかったようである。とりわけ、女性側の親、娘の結婚を「他家に嫁がせること」と考える親とすれば、差別を受けるかもしれない環境で「嫁」としての苦労をさせたくないという親心から結婚に反対したとしても不思議はない。そして、配偶者がアイヌ民族であることは結婚後も家族・親族内のデリケートな問題であり続ける。「親からは何も言われることはなく、暗黙の了解だったと思う。…その後、現在まで彼女がアイヌであることについて、親との間で話題にしたことはないものの、同じ地元なので当然両親も知っている」（和人夫・老壮年）、「（自分の親きょうだいが）「変わった顔をしているな」と言った。母親は盲目だったので、母親にはアイヌ民族であることは言わなかった」（和人妻･老年）というように、「知っているけれどもあえて触れない」類の問題として扱われるのである。

表６－３　結婚のいきさつ

	世代	出会い・家族の反対はあったか。
和人妻	老年	・夫の実家がアイヌであることは結婚するときには知らなかった。 ・夫は顔も知っていて話をしたこともあった。夫はお酒もタバコも飲まないというし、父親は農家へ嫁ぐよりは鉄道の方がいいと思っていた。自分は嫌だったけれど、「いいかな、自分の運命かな」と思い結婚した（22歳）。
		・18歳で結婚。彫りは深くて、エキゾチックな感じだけれど、昔のアイヌのようにすごく髭をのばしているような感じではなかった。普通の人と大して変わらないと思っていた。噂では、アイヌだというのは聞いていたが、別に気にならなかった。親戚などには血が濃い感じの人がいて、そういう人たちを見たらはっきり「あっ!」というような感じがした。 ・両親やおばさんには、アイヌだということで、結婚を反対された。だが、そのことは夫には言わなかった。 ・周りの人がやはり「アイヌの人はこうだ」とかの陰口はあった。親もそういうことを言っていたが、自分自身は全然関係なく一緒になった。
		・20歳で1人目の夫と結婚。27歳くらいで離婚後、2人目の夫と知り合って結婚。結婚するときには夫がアイヌであることは知っていた。夫がアイヌであることについては何も気にしなかった。夫の母親は、夫がシャモを連れてきてくれたということで自分を歓迎してくれた。自分の両親に反対されることもなく、40歳頃に円満に結婚した。
		・25歳で最初の結婚。長女が生まれ、40歳で離婚。45歳の時、今の夫と結婚。娘は結婚に賛成していた。結婚するときには、両親は夫がアイヌだからということではなく、14歳も年が離れているということで反対した。夫の両親は年上でもちゃんとやってくれればいいということで反対しなかった。夫はアイヌという感じはしなかったし、何も言わなかったが、夫がアイヌであることは結婚する前に夫の実家へ行き知っていた。以前から自分自身は民族の違いを気にしたり、とくに区別を感じたりしたことがなかった。
		・35歳の頃今の夫と結婚。3人目の夫。今の夫と結婚するときに、夫がアイヌであることは知っていたが、とくに気にしなかった。結婚について、自分の親きょうだいから反対はなかった。反対はしなかったけれど、「変わった顔をしているな」と言った。母親は盲目だったので、母親にはアイヌ民族であるとは言わなかった。ただ、姉の夫たちが興味を示し、嫌なことを言われたことはあった。夫には言わなかった。
	壮青年	・不動産会社で知り合う。24歳で結婚（夫27歳）。好きになって結婚したので、夫がアイヌであることは気にしなかった。母親は夫がアイヌだということで結婚することにすごく否定的で、結婚式に来てから、「結婚するのをやめなさい」「もう、このまま帰ろう」と言われた。自分はアイヌのことを何も知らなかったから、どうして夫のことを嫌うのかわからなかった。父親や兄は、距離が遠いので何かあったときに困るということ（しかし、本心ではアイヌだということでは）で反対した。結婚式に叔父叔母も来てくれた。親戚はとくにアイヌだからということは言わなかった。
		・職場で夫と出会い30歳で結婚。結婚するときに夫の実家に行ったが、普通の一般の家庭だった。夫がアイヌであることは、結婚して、夫の両親からウタリ協会に入ることを勧められ、わかった。アイヌの人だと意識するのは夫が初めてである。夫がアイヌだとわかっても「そうなんだ」という感じで、嫌だとは思わなかった。自分の実家でもとくに夫がアイヌだとわかった後も何もなかった。
		・20歳で結婚。夫がアイヌなので両親に反対された。父親はすぐにあきらめたが、母親には結婚式をあげる前日までずっと泣かれた。長姉はすでに結婚していたので、長姉の夫の親に相談したとは言っていたが、反対はしなかった。次兄も賛成してくれたが、長兄と次姉には反対された。
		・夫と知り合い結婚（24歳）。結婚するときに夫がアイヌだということは知らなかったし、夫も何も言わなかった。夫のおじいちゃんの写真を見たときに、もしかしたらアイヌかもしれないと思ったが、別に気にはしていなかった。母親は人種差別を嫌う人なので、夫がアイヌであることを知っていたとしても反対はしなかったと思う。
		・22歳で恋愛結婚。結婚にあたって民族性を考慮したこともないし、両親からの反対もなかった。
		・19歳で結婚。結婚するにあたって大変なことはなかった。夫がアイヌだということで反対されることもなかった。自分の親は気にしなかった。自分自身も夫がアイヌであることは意識しなかった。逆に、遠い親戚の方が、強い反対ではないが、「いいのかい?」みたいな感じはあった。夫の方の家族は、反対されると思っていたようだ。
		・子どもができたので結婚した（19歳）。夫がアイヌだということで両親には反対されたが、アイヌというもの自体を知らなかったし、血筋は関係ないと言って結婚した。母方祖父が「アイヌでも普通の人でも毎日仕事に行って、生活費を持ってくるから別に関係ない」と言って両親を納得させてくれたし、お腹に子どもがいたので、それほど反対されなかった。
和人夫	老壮年	・自分の家族はアイヌ民族との結婚に猛反対で、父親が結婚をさせないようにいろいろと手を打ってきた。自分は、自分が好きになった女性と結婚すると決めたのだから、反対されても関係ないと押し切った。
		・27歳のとき結婚。自分自身は妻がアイヌであることはまるで気にならない。結婚する際、彼女がアイヌであることを親がどう思うかということは多少気になっていた。だが、親からは何も言われることなく、暗黙の了解だったように思う。現在まで彼女がアイヌであることについて、親との間で話題にしたことはないものの、同じ地元なので当然両親も知っている。しかし、結婚で苦労したことは何一つなく、うまくいっていると思う。
		・結婚するとき、母親に妻がアイヌなので結婚してほしくないということは言われた。それほど極端な反対ではなかった。妻の家の方からも、アイヌだけれどいいのかという話はあった。 ・結婚に反対はしていたが、今は孫もできて仲良くやっている。今の時代は話さなくてもということで結婚相手には話さなかった。

一方、アイヌ配偶者側の家族の反応はどうだったのかというと、これについてはほとんど語られていないことから、特記するほどの反対に遭ったという記憶はないものと思われる。むしろ、アイヌ配偶者の親は結婚に反対ではなく、歓迎するところもあったようである。なぜなら、和人との結婚によってアイヌの血が薄められることをよしとする考え方があったからである。たとえば、「夫の母親は、夫がシャモを連れてきてくれたということで自分を歓迎してくれた。ストーブのうえで豚足の丸焼きをしてご馳走をしてくれた」（和人妻・老年）という言葉がある。とすれば、アイヌ配偶者の親は、和人配偶者の親がアイヌとの結婚を許さないことの方を心配するのであり、「夫のお父さんは、たぶん反対されると思っていたと言っていた」（和人妻・壮青年）、「妻の家の方からも、アイヌだけれどいいのかという話はあった」（和人夫・老壮年）というように、結婚を願っての遠慮がちな態度をみせている。このように、和人とアイヌの人々の結婚は、対立や葛藤や悲嘆などを少なからずともなうものであった。しかしながら、結婚から年月が経ち、子や孫をもつ現在の和人配偶者からすれば、これらの話は昔話のひとつとして語られるものになっている。

ここで、「和人夫をもつアイヌ妻」「和人妻をもつアイヌ夫」のうち、和人との結婚の経緯や結婚をめぐる周囲の反応などについて述べている者の回答から主なものを参照することにしよう（表６－４）。アイヌの人々からみた和人配偶者とその家族の結婚への態度が語られている。そこで気づくことが２点ある。１点目は、アイヌの人々のなかには、先述のように、アイヌ民族の身体的な特徴が混血によって後退することが子孫の生き易さのためにはよいとの見方をする者が少なからずいることである。「アイヌの人と結婚したら子どもがどうなるのかと考えたことはある。…アイヌの特徴が出るようになったらちょっとかわいそうだなと考えたことはある…」（30 代アイヌ夫）、「結婚するときに次の世代のことを考え、アイヌの人は避けるという意識があった」（50 代アイヌ妻）、「祖母は孫たちに「アイヌと結婚すると血が濃くなるから（和人と結婚した方がいい）」と話していた」（50 代アイヌ妻）というのである。

しかし、既にみてきたように、和人配偶者側からは差別的対応をされることがある。「妻の父親から「お前に娘をやらない」というのではなく、「アイヌにはやらない」と言われたことはショックだった。アイヌであることが理由で何か言われたのはそれが初めてで、その後もない」（60 代アイヌ夫）、「夫の親もきょうだいも、ひとつひとつの場面で民族の違いということを言い、夫もそれに同調していた」（50 代アイヌ妻）といった経験があげられている。その際、和人配偶者の出身地によって、差別的な態度の有無･強弱に違いがあると認識されていること。これが２点目である。つまり、「田舎の方の本当にアイヌのことがわかるところの方が反対する。田舎は差別されたり、馬鹿にされたりというイメージがあるので、あそこにはやりたくないというのがある。町や都会の人はアイヌのことをわかっていないから差別の意識が少ないのだろう」（50 代アイヌ夫）という見方である。事実、北海道外出身の和人配偶者には偏見や差別が全然なかったと語る者もいる（50 代アイヌ妻）。差別意識は環境だけで決まるわけではないが、差別される人々の存在を知ることが差別意識を育てることは大いにあり得ることである。つまり、結婚する当事者である和人についていえば、先に述べたように、アイヌの人々と同じ地域で育った経験が親しさ・近しさを増進させる。しかしながら、その一方で、親世代についていえば、アイヌ民族が居住する地域に暮らすこと、あるいは、彼らの地域社会における暮らしぶりや位置づけを知ることで差別意識が強化され、その結果として、自分の子どもとアイヌ民族の結婚について否定的になる場合もあるということ

表６－４　結婚　アイヌ夫からみた和人女性との結婚　アイヌ妻からみた和人男性との結婚

	世代	出会い・家族の反対はあったか。
アイヌ夫	70代	・元妻とは仕事先の関係で知り合った。結婚するとき、アイヌ民族であることはとくに意識しなかった。結婚相手はアイヌ民族であることは関係ないという考えで、その両親も自分がアイヌ民族であることは知っていたと思うが何も言われたことはなかった。
	60代	・妻の父親が、アイヌであることで結婚に大反対した。しかし、反対していたのは父親だけだったので、妻の親戚の叔母さんや兄弟が結婚するのを手助けしてくれた。結婚するときに民族性は考えなかった。好きになれば、相手がアイヌでも和人でも関係なかった。孫ができてからは妻の父親も何も言わなくなった。
	60代	・北海道に遊びに来ていた妻と知り合って結婚した。妻は内地の人なので、アイヌというのを見たことがなかった。何も言わないで結婚してしまった。今は、妻や妻の家族も、自分がアイヌであることを知っていると思うし、人種的に違うと感じていると思う。
	60代	・結婚するときに、妻が両親から「アイヌと一緒になるのか」と言われたことは、結婚して2年くらいしてから分かった。自分は直接言われたことはないが、変な眼で見られたことはある。たまたま結婚したのが和人だっただけである。縁があれば、アイヌの人でも一緒になっていたと思う。
	60代	・妻の父親からアイヌであることで結婚に反対されていた。妻にはアイヌであることを話し、それでもいいと言われていた。父親からアイヌとは結婚させたくないと面と向かって直接言われた。妻の父親から「お前に娘をやらない」というのではなく「アイヌにはやらない」と言われたことはショックだった。たまたま和人と結婚したが、民族で結婚相手を考えることはなかった。
	50代	・結婚するのに苦労したことはなかった。妻の実家が遠くて苦労しているだけ。妻がこっちの方で仕事をしていて知り合った。差別もなく、反対されたこともなかった。田舎の方の本当にアイヌのことがわかるところの方が反対する。田舎は差別されたり、馬鹿にされたりというイメージがあるので、あそこにはやりたくないというのがある。町や都会の人はアイヌのことをわかっていないから差別の意識が少ないのだろう。自分がアイヌだということを言っても、妻の親は「あ、そう」とあっさり聞き流した。反対してくるかな、と内心思ったが、すんなりいって拍子抜けした。
	50代	・25歳のときに結婚。妻は友達の友達だった。妻は登別の出身。高校を卒業する頃に知り合った。結婚するときには自分がアイヌであることで妻の母親に反対されて苦労した。妻の母親は反対していたけれど、父親は反対していなかったから、自然に問題は解決されて結婚した。 ・容姿も悪くはないし、遊んでいるわけでもない。だから、結婚に反対されたとき、「何がいけないの」と思い、びっくりしたし、強烈だった。
	40代	・妻とは友達の紹介で結婚した。妻にはとくに自分がアイヌであることは話していないが、アイヌであることは知っていたと思う。結婚するときに民族性について気にしたり、考えたりはしなかった。 ・結婚するときに民族性について考えなかったが、小さい時はシャモと結婚したいと思っていた。女性はアイヌよりシャモの方がいいと思っていたので、そういう面では意識していたのかもしれない。
	40代	・30歳のときに結婚。結婚するときに自分がアイヌであることで反対されることはなかった。結婚や恋愛について、アイヌの人は遠慮したいという気持ちがあった。生まれてくる子どものことを考えると、少し薄くなった方がいいと思った。差別のようになってしまうが、子どものことを考えると普通の人がいい。
	30代	・24歳のとき結婚。結婚するときに苦労したこともない。アイヌの人と結婚したら子どもがどうなるのかと考えたことはある。アイヌの特徴が出るようになったらちょっとかわいそうだなと考えたことはあるが、アイヌと結婚したくないと思ったわけではない。
アイヌ妻	70代	・結婚するときには夫に「私アイヌ人だけどいい?」と言ったら「いいんじゃない」と言ってくれたので、とくに苦労することはなかった。元夫はアイヌであることにはこだわらなかった。夫と結婚する前に結婚を考えた人もいたが、アイヌの血を引いていることで結婚をあきらめた。
	60代	・長男が生まれた時、姑が病院に来て「うちの孫ではない」と言われた。夫にも「俺の子ではない」「子どもは産むな」「子どもはいらない」と言われた。心は冷えてしまったが、結局は3人子どもを産み、3人目が生まれた25歳のとき、夫と別れた。その後復縁し、死別。
	60代	・17歳で最初の結婚。最初の夫は和人であるがアイヌに育てられた。親戚に何か言われることもなかった。恋愛や結婚をするときにはアイヌであることは意識した。後からアイヌだと言ってだめになるという話はよくあるから、それは絶対に嫌なので、はじめに言う。夫にはそれはもうわかりきっていることだったから、自然に入り込めたのだと思う。
	50代	・夫とは死別。35歳のとき、知り合いに紹介してもらった夫と結婚した。夫は再婚。夫の親兄弟たちも誰ひとり反対しなかったから苦労もしないでスムーズに結婚できた。夫は本州の人間だから、偏見も差別も全然なかった。
	50代	・夫とは離別。32歳で結婚。結婚について相手は偏見のない人がいいと思っていた。後から聞いていなかったと言われるのも嫌だし、結婚するときにはアイヌの血を引いていることを伝えるのが大事だと思っていた。もしそんなに毛深くなかったら、「黙っていたら、ほとんどわからないか」みたいにアイヌであることを言う必要もなく、言わないということもあり得たかもしれない。毛深いということがネックで、男性と付き合うことに憶病な部分はあり、結婚が遅くなったと思う。また、毛深いということで、結婚するときに次の世代のことを考え、アイヌの人は避けるという意識があった。
	50代	・22歳で最初の結婚。夫の親もきょうだいも、ひとつひとつの場面で民族の違いということを言い、夫もそれに同調していた。夫の実家からしまいには「あなたの親、きょうだいを一歩たりともうちの玄関から入れないで」と言われた。耐えられなくなり離婚した(28歳)。

アイヌ妻	50代	・2回目の結婚はもっとひどかった。娘には「お母さんはお手伝いさんではあるまいし、ばかにされて、アイヌアイヌって、民族の違いだとまで言われて、そこまで我慢することないよ、家族3人で生活しようよ」と言われ離婚した。
	50代	・22歳のときに結婚。夫は友達の友達で、和人の普通の家庭で育った。夫の両親は亡くなっていたので、結納や家柄についてはお互い考える必要はなかった。恋愛や結婚についてアイヌだからと反対されたという話を周りから聞いたことはなかった。祖母は孫たちに「アイヌと結婚すると血が濃くなるから（和人と結婚した方がいい）」と話していた。
	40代	・21歳のときに結婚。恋愛結婚だったが、結婚するときにはとくに苦労はなかった。何も問題はなく結婚したが、結婚して20年目くらいの時夫の父親に「自分の息子が選んだ人にそれは言えなかったけれど、孫が生まれるとなるとアイヌの血が入るのですごく嫌だった」と初めて聞いた。夫の親は、自分の親が結納のときに挨拶に行った時点で、母親を見て、アイヌだろうと思っていたそうだ。なぜ今頃言うのかと笑って済ませたけれど、たぶん夫の両親には差別的な感情があったのだと思う。「何がだめなの?何が違うの?」と言ったら、おじいちゃんは「何も違うことはないのだろうけど、昔、アイヌは臭くて毛深くて」と言った。
	40代	・19歳のときに結婚。結婚するときには、夫も夫の両親も一切アイヌのことについて言わなかった。自分から夫に言ったら、「普通生まれてきた以上、みんな人間だから何が関係あるんだ（アイヌであろうとなかろうと関係ない）」と言われ、それからは一切言ったことがない。
	30代	・付き合っていた時に、夫はアイヌであることについて触れたこともなかったので気にしていたかどうかわからない。結婚して鵡川に来て、みんなが集まった時に、夫の兄弟や友達関係が「アイヌに似ているよね」と言っているのは聞いたことはあるが、あえて言われたことはない。民族性についてあえて触れたくないという思いが心のどこかにあったかもしれない。

である。

とはいえ、和人配偶者において、自分の家族の反対があったことを語る者は15人中7人であるのに対して、アイヌ配偶者においては、和人配偶者の家族の反対について明快に語る者は61人中８人しかいない。たしかに、「結婚相手はアイヌ民族であることは関係ないという考えで、その両親も自分がアイヌ民族であることは知っていたと思うが何も言われたことはなかった」（70代アイヌ夫）といった内容の発言が多く、アイヌ配偶者の語りだけをみると、和人との結婚はそれほどの問題なく進んでいくのが一般的との印象を受けるほどである。その理由のひとつとしては、和人配偶者の家族の反対がその家庭内にとどまり、アイヌ配偶者には具体的には伝わらなかったということがあると思われる。ある和人妻は「姉の夫たちが興味を示し、嫌なことを言われたことはあった。夫には言わなかった」（和人妻・老年）と述べ、また、ある60代アイヌ夫は「妻が両親から「アイヌと一緒になるのか」と言われたことは、結婚して２年くらいしてから分かった。自分は直接言われたことはないが、変な眼で見られたことはある」と述べている。結婚に際して、和人配偶者の家族に面と向かって反対される経験をしていない場合は、アイヌ配偶者としては「反対された」と声高に語ることはしないだけであろう。実際のところ、結婚後も両家の間にはさまざまな衝突や葛藤がある。たとえば、結婚時には反対されなかったものの、結婚20年目になって、和人夫の父親から「アイヌの血を引いているよね」「自分の息子が選んだ人にそれは言えなかったけれど、孫が生まれるとなるとアイヌの血が入るのですごく嫌だった」と言われた40代アイヌ妻もいる。このように、和人とアイヌの人々の結婚はさまざまな困難をともなうものであった。

第４節　アイヌの血筋の子ども

和人配偶者にとって結婚相手がアイヌ民族であることは「愛情ゆえに拘らない」「気にならない」類の問題であったことは既に述べた。つまり、民族の違いという事実をある種の違和感をもってとらえていたと「自覚する」者はいなかったということである。しかし、結婚後は、アイヌ配偶者の育った環境に触れ、アイヌの年長世代との関わりが増えることによって、自分の配偶者がアイヌ民族

であることがリアリティをもって再認識されるようになっていく。たとえば､夫の母親が｢毎日トゥキにお酒を入れてお祈りした後、パスイで自分にお酒をかけ、飲んで」いるのを見たり「熊祭りを撮ったNHKのビデオ」を観たとき（和人妻・老年)、「来る人来る人がみんなアイヌで外人さんを見ているよう」だったとき（和人妻・壮青年)、配偶者の実家を訪問したときに「アイヌ民族の食事や文化に接」したり「近所のアイヌ民族のお年寄りが集まりアイヌ語で会話をしているといった場面を見かけ」たとき(和人夫･老壮年)などが印象深い場面として記憶されている。こうして徐々にアイヌ社会との関わりを深めながら、和人配偶者は結婚生活をおくることになるが、全体として、暮らし向きはそれほどよいとはいえない状況であった。年長世代のなかには、アイヌ夫の飲酒、暴力、怠惰に悩まされた者もいる（和人妻・老年２人)。

さて、子育ては結婚生活のなかでも重要で責任をともなう仕事である。とくに、子育ての主担者となることの多い妻にとっては、子育ての場面に関わる時間が長いだけに、そこから得るもの、そこで考えさせられることは多々あったと推察される。アイヌ民族と結婚した和人配偶者にとって、子育てを通じてアイヌ社会と向き合うことは、自らのアイヌ性を確認するプロセスともなっていたと思われる（表６－５)。その契機は３つある。

１つ目は、子どもに対してアイヌの血筋を告知するときである。和人配偶者が子育てをするうえでもっとも気にかけているのは、わが子における民族としてのアイデンティティの問題であり、いつどのようなタイミングで「アイヌの血筋であること」を伝えるかが大きな課題となっている。アイヌの血筋であることは、従来、結婚や就職において不利な条件として働くことが少なからずあったため、アイデンティティの構築もさることながら、現実問題として差別をこうむらないかどうかが懸念される。この点に関して、親自身に揺らぎや迷いがあると、子どもに事実をうまく伝えることができない。その一例を掲げる。

> 「アイヌの血が自分の血の中に流れていることをどういうふうに子どもに説明しようかすごく悩んでいる。一度はちゃんと話さなければならないと思っているけれど、その切り出し方がわからない。というか、言わなくてもいいことなのか、言わない方がいいのかというのもある。もし、知らないでいて、結婚するときに、そういうことが理由で反対されて、その時に初めて知るのなら、かわいそうだと思うし、どうしていいかちょっとまだ悩み中だ。もしかして、言ってもまったく気にしないかもしれないけれど、変なショックを受けたら嫌だと思う。周りは何とも思ってないのに、それを知ることによって自分が勝手に思い込むときがあるのではないか。「ああ、私はそうなんだ、そうなんだ」って。それで前向きになれなかったら嫌だと思う。自分がそうだということになると、悪いことではないけれど、卑屈になる部分があるのではないか」(和人妻・壮青年)。

この和人妻自身は結婚に反対された経験をもたないが、それでも、10代の子どもについて上記のような不安を抱えている。こうした不安は和人配偶者にある程度は共有されていると推察される。とくに、娘をもつ親はアイヌの身体的な特徴が結婚を遠ざけてしまうことを恐れる。

しかし､「アイヌの血筋」について伝えることの不安を訴えるのはこの１人のみである。その他の人々をみると､「伝えるか・伝えないか」を迷う段階は過ぎ、現実として子どもはそのことを既

に知っているという状況である。そのうち、和人配偶者自身がその事実を伝えたというのが６人いる。「息子には小さいときから「アイヌって何？」と言われ、「アイヌなの？」と訊かれたら「そうだよ」と言えるよう誇りを持ちなさいと言ってきた」（和人妻・老年）、「息子には、４歳のときから「おまえはアイヌ」と言っている」（和人妻・老年）、「（アイヌを）馬鹿にしているような感じがあったので、「人種差別してはいけない」と話し、このままではアイヌを馬鹿にするようになると思い、初めて２人の娘（中３と中１）にアイヌの血が混じっていることを話した」（和人妻・壮青年）、「子どもには小さいときからアイヌであることを話している」（和人夫・老壮年）など、様々なタイミングで事実が伝えられている。

これに対して、子ども自身の受け止め方は様々である。「同じ兄弟でもアイヌに対する意識はそれぞれまったく違っていて、アイヌを尊敬する子もいれば、恥ずかしいと思っている子もいる。息子はアイヌということに無関心で、アイヌだろうがなんだろうが関係ないという感じだ。それぞれに違うので気を遣う」（和人妻・壮青年）という言葉が示す通りである。しかし、事実を淡々と受け入れ、アイヌ文化には無関心な様子をみせる（和人妻・老年１人、和人妻・壮青年１人）にせよ、「「やったー」というふうに喜んだのでびっくりした。自分たちがハーフであることがうれしかったようだった」（和人妻・壮青年）という反応をするにせよ、子どもに事実を知らせる・子どもが事実を知ることで、自分も子どももアイヌ民族という運命を前向きに受け入れていけることを、和人配偶者は実感している。彼らは、若い世代がその事実を柔軟に受けとめていく様子に接して、知ることは必ずしも負荷を与えられることではないことを学び、アイヌ社会を自分の居場所として受け入れていったと考えられる。

次いで、２つ目の契機は、ウタリ協会へ加入するときである。協会は教育資金の援助の窓口になっており、ここに加入しなければ援助は受けられないと思われている。そのため、子どもの高校・大学進学を機に加入する者も多く、加入に際してアイヌの血筋であることが子どもに伝えられるケース（和人妻・壮青年）もある。このウタリ協会からの奨学金を 15 人中８人が受給した経験をもつ。経済的余裕のない家庭にとって、この援助の仕組みは、子女の教育達成を可能にする有難いものである。

ところで、和人配偶者がこの仕組みを利用することは、アイヌの人々がそれを利用するのとはやや意味合いが異なる。というのも、和人配偶者にとって、教育資金の援助を受けることは、第１に、自分たち家族が「アイヌ民族」であることを内外に宣言することであり、第２に、日本の社会における「貧しいアイヌ」「優遇されるアイヌ」としての位置づけを受け入れ、援助の対象として特別扱いされることを受け入れることだからである。このことは、アイヌの血筋であることを「家族の問題」「私的な問題」として子どもに伝えることとは違う。家族が和人社会ではなくアイヌ社会の一員として承認されることであり、アイヌとしてのアイデンティティを持つことを求められることだからである。とすれば、アイヌ社会に居場所が得られたと思う者もいる一方で、自分と家族が他のアイヌの人々と同列の存在として扱われることに違和感をもつ者もいるだろう。この違和感とは、和人配偶者としてアイヌ社会に順応しつつも、自らをアイヌ民族の範疇に入れるまでには至らないといった「宙ぶらりん」の心境と考えることができる。

したがって、奨学金については、「本当にいただいてもいいのかという気持ちがある」（和人妻・老年）という感謝の声が聞かれる一方で、「ウタリ協会のお金を使って、子どもを学校にやらせよ

表6－5　子どもについて

	世代	ウタリ対策の援助を利用したか	わが子がアイヌの血をひいていることについて
和人妻	老年	奨学金受給せず	・子どもたちが中学校の時に夫の兄に「ウタリ協会に入ればいい」と言われたが、ウタリ協会のことがよくわからず、その時には入らなかった。その時に入っていれば子どもたちも奨学金をもらえたと思う。子どもが小さい時に入らなかったのが残念。
		孫が奨学金受給	・離婚をしたときに、子どもは父の方には行かなかった。今でも父親のところには行き来していない。長男や次男が結婚するときに父親の話は一切していない。でも、長男や次男はアイヌ協会に入って、子どもたち（孫）が学校へ行くための奨学金をもらっている。協会に入らなければ奨学金はもらえないので、お嫁さんたちはアイヌであることは知っている。
		奨学金受給せず	・ウタリ協会のお金を使って、子どもを学校にやらせようとは思わなかった。自分が勉強しようと思ったら努力しなさいと話している。 ・長女はアイヌの人と結婚したが、アイヌの活動はしていない。長女の子どもたちは、アイヌの血が流れていることについてとくに抵抗はなく、そのまま受け入れている。
		長男が奨学金受給	・息子が高校に入り融資を3年間受けているが、本当にいただいていいのかという気持ちがある。ありがたく思っているので、今回のインタビューも協力したいと思った。 ・自分自身は嫌な思いをしたことがないけれど、息子には小さいときから「アイヌって何?」と言われ、「アイヌなの?」と訊かれたら「そうだよ」と言えるよう誇りを持ちなさいと言ってきた。息子は「別に苦労したことはない」と言っているが、同級生に何人かアイヌがいるよと話したら、安心感を持ったようだ。息子はあまりアイヌ文化に関心を持っていない。息子にはこれから嫌な思いをしない人生を送ってほしい。今まで、息子はとくに何もなく普通に生活している。
		—	・息子には、4歳のときから「おまえはアイヌ」と言っている。息子は保育園の頃から先生に「うちのお母さん、大きな会場で踊るんだよ」と言っていた。小学校ではいじめにあった。先生にアイヌであることを伝えておいたが配慮がなかった。高校になってよい友だちができた。今の友だちはアイヌだということがわかってつきあってくれている。
	壮青年	奨学金受給	・長男は学資資金を借りて大学へ行った。学資資金を借りるために毎年在学証明書を長男は何も言わずもらってくれていた。最後に、就職のお祝いが出るが、長男から「（家が困らないなら）もらわないでほしい」と言われた。学資資金を借りて長男は大学にいき、そのことについて親子で話したことはなかったが、嫌だったのかな、とふっと思った。 ・長男とも長女ともアイヌ民族についての話をしたことがない。普通の生活だから子どもたちもアイヌ民族であるということは意識していないと思っていたが、就職のお祝い金についての長男とのやりとりから、長男は嫌だったのかなと思ったりした。父親がアイヌであることを子どもたちはわかっていた。父親がアイヌ文化を子どもたちに伝えるということはなかった。
		授業料免除。 高校進学に際して 進学奨励制度。	・夫の実家の両親がウタリ協会の会員になっていて、ウタリ協会に入ると補助や援助があるから入ることを勧められて、ウタリ協会に入った。子どもたちはウタリ対策の援助を利用し、授業料の免除を受けている。下の子も来年高校へ入学するので、進学奨励制度を利用しようと思っている。 ・子どもたちにはウタリ協会に加入するときにウタリ協会について説明した。子どもたちは「わかりました」という感じだった。
		離婚後、子どもたち 全員が援助を受けた。 長女は看護学校、 次女は大学に進学。 次女はロシアにも行った。	・子どもにたいしてアイヌであると極端に感じることはない。子ども同士では同じ兄弟でもアイヌに対する意識はそれぞれ全く違っていて、アイヌを尊敬する子もいれば、恥ずかしいと思っている子もいる。息子はアイヌということに無関心で、アイヌだろうがなんだろうが関係ないという感じだ。それぞれに違うので気を遣う。子どものことではアイヌを意識しないわけにはいかない。 ・娘2人には、まず男性と付き合う時に自分がアイヌであることをきちんと言いなさいと話している。長女が結婚する時には相手の親にアイヌであることをはっきり言った。次女も付き合っている人がいるが、アイヌであることを話している。子どもは自分自身で自分のことを守っていかなければならないから、正しいかどうかわからないけれど、しっかり話をした。

和人妻	壮青年	娘が就学援助を受けている	・娘たちにはアイヌの血を引いているということをずっと話していなかった。娘が中学3年のときに、学校の教科書の中にアイヌのことが出てきて、自分がアイヌだとは知らないので、馬鹿にしているような感じがあったので、「人種差別してはいけない」と話し、このままではアイヌを馬鹿にするようになると思い、初めて二人の娘（中3と中1）にアイヌの血が混じっていることを話した。子どもたちは「やったー」というふうに喜んだのでびっくりした。自分たちがハーフであるということがうれしかったようだった。娘は肯定的にとらえているので、アイヌであることを娘たちに告げてよかったと思っている。昔は馬鹿にされたから、結構隠している人が多かった。アイヌであることを誰にも言えず隠しておこうと思うよりは、ハーフで格好いいと思ってくれるほうが自分としてはありがたい。隠していても、わかったときに傷つくのでよいタイミングで娘たちには話したと思っている。 ・つい最近になって初めてウタリの人からウタリ協会の就学援助の話を聞いて、娘たちはウタリ対策の援助を受けるようになった。ウタリ協会に入っていないと情報は入ってこない。自分は和人なのでウタリ協会に入れると思っていなかったが、ウタリの子を持った親が入れるとウタリ協会に入っている友達から初めて聞いて2009年に入った。
		長男が奨学金受給（高校のときから）	・長男は今は専門学校にいっていて、日本育英会の奨学金を借りている。これが12月に終わってしまうので、学校独自の奨学金試験を受けたら年間10万円もらえることになった。この他にアイヌ協会の奨学金ももらっている。それでも、全然間に合わない。子どもは自分がアイヌであることを知っている。長男はアイヌだと意識している。長女は全然気にはしていない。
		―	・20年くらい前は、アイヌだということで結婚を反対されたりしたことがあると聞いたので、子どもたちのことが心配ではある。娘のことが心配だ。 ・上2人はどうかわからないけれど、一番下の娘は、自分がアイヌだとわかっていないと思う。一番下の娘は、歴史の中で習っているから、アイヌのことを古代の人だと思っている。 ・アイヌの血が自分の血の中に流れていることをどういうふうに子どもに説明しようかすごく悩んでいる。一度はちゃんと話さなければならないと思っているけれど、その切り出し方がわからない。というか、言わなくてもいいことなのか、言わない方がいいのかというのもある。もし、知らないでいて、結婚するときに、そういうことが理由で反対されて、その時に初めて知るのなら、かわいそうだと思うし、どうしていいかちょっとまだ悩み中だ。もしかして、言ってもまったく気にしないかもしれないけれど、変なショックを受けたら嫌だと思う。周りは何とも思ってないのに、それを知ることによって自分が勝手に思い込むときがあるのではないか。「ああ、私はそうなんだ、そうなんだ」って。それで前向きになれなかったら嫌だと思う。自分がそうだということになると、悪いことではないけれど、卑屈になる部分があるのではないか。
		奨学金受給せず	・子どもたちは、自分にアイヌの血が混じっていることは知っていて、冗談で「お前はハーフだ!」と言うことはある。しかし、「アイヌって何?」と聞かれても、答えられないし、分からない。
和人夫	老壮年	―	・自分の子どもたちは、和人としての感覚が強い。長男が結婚するときには、夫婦の連名で長男の妻の両親へ、アイヌ民族の血が混じっているという手紙を出した。相手の両親は結婚相手がアイヌ民族の血をひいていることに対しては何も言わなかった。ちなみに、相手の家は北海道ではない。三男は最近「僕も4分の1はアイヌ民族の血が入っているんだもんな」という話をしていた。
		―	―
		奨学金受給	・次男はアイヌ文化が好きで興味を持っている。アイヌ語が出てくると、教えてくれたり、アイヌの歴史の話など詳しく知っていて話してくれたりする。次男はアイヌ文化に興味があり勉強をするのは好きだと言っているが、受験生だし、好きで本を読んだりはしているけれど漠然としている。 ・子どもには小さいときからアイヌであることは話している。周りにもアイヌはいるし、友達にもアイヌはいる。自分の子どもは顔つきはアイヌのようではない。

うとは思わなかった。自分が勉強しようと思ったら努力しなさいと話している」（和人妻・老年）と述べ、受給しない選択をした者もいる。ただし、アイヌとしての特別扱いを望まないとしても、現実に進学資金が不十分なら受給せざるをえない。和人配偶者にとっては、アイヌ社会に対する自らの構えを問われる場面であったと思われる[2)]。

最後、3つ目の契機は、子どもの将来について語るときである（表6－6）。和人配偶者本人が「今後どのように生きていきたいか」を問われる設問において、6人が子どもの将来に言及している。この6人はすべて和人妻である。和人夫は、自分の将来とアイヌ民族一般の将来については述べるが、自分の子どもの将来については発言していない。「アイヌ民族の将来に関しては、自分自身には関係ないとも思うが、（立場上）そうもいかない」（和人夫・老壮年）という言葉が聞かれた。和人妻と和人夫の言葉を比較すると、母親にとって子どもがいかに近い存在であるのかがわかる。

表6－6　今後について（アイヌであることをどのようにとらえて生きていくか）

	世代	今後どのように生きていきたいか（アイヌとして積極的に生きていきたい、とくに民族は意識せず生活したい、極力アイヌであることを知られずに生活したい、その他）　その理由
和人妻	老年	・とくに民族は意識しないで生活したい。これまでアイヌ民族であることはあまり意識していない。アイヌの人を見て、どうのこうのということもないし、自身がアイヌだから何かあるわけでもない。
		・自分自身はアイヌの血をひいていないのでとくに考えたことはない。結婚をするときも普通の人と結婚する意識だった。子どもがもしアイヌ民族として生きていきたいと言っても反対はしない。自分の友達にアイヌの人と一緒だったことを言ったことはない。子どもがアイヌの血をひいていることも言うことはない。 ・孫はある程度アイヌの血筋であることを知っていると思うが、直接聞いたことがないのでわからない。孫にも話したことはない。アイヌの人たちは自分を大事にしてほしい。
		・みんなが一つの輪になってほしい。そのためには、上の人にみんなの意見を聞いてほしい。今は下の者が上の役員に意見を言うと排除されてしまう。今のままだとばらばらになってしまう。自分もアイヌの血が流れていたら意見を言いたいが、シャモと言われ、それが出来ないのが歯がゆい。役員、事務局が全部改正されるといい。事実上、今の協会を一度解体して新しい組織として生まれ変わるしかない。 ・文化も、そして文化を保存することも大事だけれど、汗を流して働けば文化を守っていくことが出来る。入ってくるお金を当てにしていては文化を守っていけない。働けば一番大事なことに気がつくと思う。民族を守っていくためにもっと努力したらいい。
		・アイヌ民族であることはとくに意識せずに生活したい。鵡川に帰ってきてアイヌを意識しないわけではないが、普段の生活ではそんなにはしていない。アイヌ協会から来る便りは必ず読んでおり、アイヌのことをもっと知りたいと思う。興味があることと意識することとは別で、興味のあることをやってアイヌの差別がなくなることにつながっていけばいいと思う。鵡川町ではアイヌの人も他から入ってきた和人も仲良く共に生きている。自分はずっと関東で暮らし、アイヌについて意識することなく鵡川に移り住んだが、今はアイヌ協会に入って暮らしている。
		・とくに民族は意識せず生活したい。息子にはアイヌだと話しているから、アイヌだということを知られずに生活したいという気持ちではない。 ・アイヌ文化関係の団体では、和人でアイヌの夫が亡くなった時に会員をやめて、また会員になった人もいる。アイヌ関係の団体では、「夫が死んだら、（妻は）アイヌじゃなくなるから正式な会員になれない。活動はしているが許されない」というが、そういうふうに分裂するようなことを言うのはだめだと思う。アイヌの内部分裂をどうにかしなければならないと思う。和人もアイヌも女性は虐げられてきた。世の中はキャリアウーマンといっても男の世界。アイヌの世界も男の世界。
	壮青年	・子どもたちはアイヌの血を受け継いでいるが、アイヌ民族として活動していくかは本人の意思に任せる。今はとくに興味関心はないようだ。 ・とくに民族は意識しないで生活したい。どのような生活と言っても、普段はとくに意識していない。今回の調査のように協力できることがあればしていこうと思う。
		・子どもにはとくに民族を意識しないで生活してもらいたい。できればそういう世の中にしたいと思う。でも、そうはいかないし、民族を認めていかなければならないから、そんなに関われないけれど民族を大切にしていきたい。国会でも色々な議論がなされ、世の中が少しずつ進歩してきたことは嬉しい。 ・アイヌ民族の本当の心の底というのはアイヌ民族自体もわからない部分があると思う。アイヌ民族は苦しい思いをしてきたけれど、そういう苦しい気持ちは薄れてきている。アイヌの人はされたことはされたこととして受け入れながら、もっと前へ行くべきだと思う。過去にされたことばかり引きずらないで、アイヌも和人も前向きにもっとお互いに自信をもって行きたいと思う。子どもにはアイヌであることに自信を持ってほしい。 ・アイヌも和人も親が認識をもっと変えていかなければならない。アイヌも孤立しているのではなく、視野を広げていく必要があるし、和人の親もアイヌのことはわからないというのではなく、歴史を知って、子どもたちにもっと広い視野でアイヌのことを教えたらよいと思う。親が狭い視野でアイヌはアイヌと教えているのが、子どもを育てていく中でとても嫌だと感じた。もっと広い目でみれば楽しいと思う。

和人妻	壮青年	・娘たちにはアイヌとして隠すことなく生きてほしい。自分自身は「子どもがアイヌで自分はシャモだ」というと嫌味に聞こえるみたいなので、あまりはっきり言わないで「混じりだ」と言っておいた方がいいと思っている。本人が好きでするのなら、上の子は手先が器用なので、工芸やお料理もいいし、下の子は何もできないが、踊りや歌をやってもいいと考えている。ウタリの勉強も本人がやりたいのならいいと思っている。下の子の色黒なのをかわいそうだと思っているが、二人とも夫や義母に似てかわいいし、自分に似なくてよかったと言われる。 ・娘がアイヌの血が混じっているということで馬鹿にされるようなことがあったら、とても怒るが、今までそういうことはなかった。娘にはアイヌと馬鹿にされないような生き方をしていきなさいと言っている。普通にシャモの子どもを育てている親の人の思いがどうなのかは聞いてみたいと思う。
		・アイヌ民族の活動に参加する気はない。
		・文化を残したいという気持ちはわかる。でも、逆に、アイヌとか和人とかの言葉もあるから、差別も生まれてくるんじゃないかと思う。協会の方から、いろいろな面で助けてもらうけれど、逆にそれで他の和人から見て、「別に、もう差別なんてないのに、ずるい。そんなに保護されて」という話も聞いたことがある。今は差別を経験していないけれど、子どもたちがこれから社会に出たり、結婚するうえでやっぱり心配かなと思う。
		・民族は意識せずに生活していきたい。ただ、どこかで関わっていかなければならないし、民族の伝統を継続するには、若い人も参加しなければならないと思う。子どもたちは、自分で興味があればアイヌについて勉強してもよいと思うし、興味がないなら強制することは出来ないと思う。
和人夫	老壮年	・年齢的に先は短いので、どんどんアイヌ民族に関する活動をしていこうという気はない。生きている間は普通に、仲間が生きているうちは顔を出そうと思っている。協会の人を見ても、ほとんど初めての人が多い。
		・アイヌ民族は、これからも、卑屈にならずに堂々と、どんどん発言していくべきだと思う。 ・アイヌ民族の将来に関しては、自分自身には関係ないとも思うが、（立場上）そうもいかない。むしろ、今後「アイヌとして積極的に生きていきたい」と個人的に思っている。 ・また、今後、アイヌ語を残せていけたらいいと思っている。初めてアイヌ語に触れてみて、フランス語のような美しくてきれいな言葉だとわかった。
		・普通に生活しているから、とくに民族性は意識せずに生活したい。テレビでアイヌの方で民族を守るために活動している人を見たことがあるが、自分の妻は意識していないと思う。学校でアイヌのことを教えるのはいいと思う。意識していない普通のひとは全然わからないから勉強するのはいいと思う。

彼女たちの言葉をみると、アイヌ民族としてのアイデンティティの重要性を主張するものは少数である。即ち、「子どもにはとくに民族を意識しないで生活してもらいたい。できればそういう世の中にしたいと思う。でも、そうはいかないし、民族を認めていかなければならないから、そんなに関われないけれど民族を大切にしていきたい。…子どもにはアイヌであることに自信をもってほしい」（和人妻・壮青年）、「娘たちにはアイヌとして隠すことなく生きてほしい」（和人妻・壮青年）というように、アイヌとしての積極的な生き方を勧める声はあまり聞かれない。むしろ、「アイヌ民族として活動していくかは本人の意思に任せる」（和人妻・壮青年）、「子どもがもしアイヌ民族として生きていきたいと言っても反対はしない」（和人妻・老年）、「自分で興味があればアイヌについて勉強してもよいと思うし、興味がないなら強制することは出来ないと思う」（和人妻・壮青年）というように、一歩引いた立場をとっている。

こうした発言が意味するものはなにか。これらは、子どもの意思を尊重するという形をとりながら、アイヌとして生きることを親の立場から勧めることはしないという守りの姿勢のように思われる。というのも、和人妻は、子どもについて、アイヌ民族であることを否定しないでほしい・誇りをもってほしいという願いと、アイヌ民族であることによる苦痛や不利益を被らないでほしいという願いをもっており、このふたつの願いが常に両立可能とは限らない現実を承知しているからである。親は、子どもに「アイヌの血筋であること」を告知し、教育を与えるところまでは関われるが、その後の子の人生に対しては無力である。子育てを通してアイヌ社会とのつながりが徐々に築かれてきたとしても、子どもの将来の生き方については慎重な態度を取らざるを得ないところに、和人配偶者とアイヌ社会・アイヌ民族との縮まらない距離をみることができるだろう。

第５節　ダブル・アウトサイダー

和人配偶者は、アイヌ民族との結婚に際して時に周囲の反対を経験し、結婚後はアイヌの血筋の子どもを育て、そのプロセスでアイヌ社会における自分のあり方を再確認しながら家族関係を調整してきた。では、このような結婚生活の積み重ねのなかで和人配偶者が得た立ち位置とはどのようなものか。そして、和人配偶者としての自己認識はどのようなものだったのだろうか（表６－７）。指摘すべき点は２点ある。

１点目は、和人配偶者はダブル・アウトサイダー[3)]の側面をもつということである。この場合

表６－７　和人である自分のアイヌ性、アイヌである配偶者のアイヌ性、あるいはアイヌ民族について思うこと

	世代	アイヌ民族について思うこと等々
和人妻	老年	・アイヌ語の悪口をおばあちゃん達から聞いて、書いていたノートが結婚するころにはとても厚くなり、悪口の辞典のようだった。夫は結婚した時にそのノートを見て怒って燃やしてしまった。
		・自分自身は夫がアイヌであることを大して気にしていなかった。夫は熊の木彫りの仕事をしていたので、アイヌだというのはわかっていたが、それでどうのこうの思ったことはない。（結婚を反対されたことについて）夫の方が、母が和人だったので、すごく理解をしてくれた。理解してくれるのであればいいけれど、かえって差別されるのは嫌だったので、夫と別れた後も、知人にアイヌの人と一緒だったことを話してはいない。
		・夫が亡くなったら、自分はただのシャモだから、後から入ってきた若い人たちにアイヌ文化関係の団体から抜けるべきではないかと言われた。先日オーケーがでて、残ることに決まった。 ・夫の兄弟はたくさんいるけれど、アイヌであることを嫌がり、拒否していて、アイヌのことをやっているのは自分だけ。 ・夫はアイヌ民族であることに誇りを持っているところと嫌気がさしているところと両方あった。夫は、アイヌの現状に嫌気はさしていたが、アイヌ文化を守ろうという気持ちは持っていたようで、アイヌの活動は夫は仕事があり参加できないので、自分が手伝うしかないと思って努力して手伝った。自分はアイヌの夫と結婚したので、ウタリ協会にずっと深く関わっているが、不快な思いもしている。初めの頃はよかったが、平成に入って、アイヌ民族であることがお金になるようになってからバラバラになってきている。昔の状態に戻った方がいいと思う。悪いのはお金。アイヌには、お金ではなく仕事を与えてほしい。国からお金が出るとなると、自分はシャモだから「該当しない」と言われ、デモや署名などで何かで必要な時は頭数に入れられる。
		・アイヌ協会に入りとくに活動はしていないが、アイヌ民族であることを意識するようになった。夫も義父も魚釣りが趣味で、アイヌの伝統が生きているのかなと思う。自分自身はアイヌの血をひいていなくても、家族がアイヌ民族なので、自分もアイヌ民族の一員だと思っている。 ・自分は普通に生きてきて、たまたまアイヌの人と一緒になり、今は北海道のことをもっと知りたくて、本を買って読んだりしている。昔のおじいさんにいっぱいお話を聞きたかったと思う。自分はアイヌではないけれど、アイヌのことには興味があり、二風谷のチセを見に行ったり、白老のポロトコタンに行ったりしている。アイヌ協会の行事で集まっているときにアイヌ語であいさつしているのを聞いたりすると、アイヌ語がわかり素敵だな、うらやましいなと思う。 ・義父はアイヌだとは言わなくても、顔を見ればわかる。隠してはいない。アイヌ民族であることに自信をもっているのだと思う。アイヌの人は明治時代の虐げられた過去があり、堂々と出来ないのかもしれないけれど、もっと堂々としていたらいいなと思う。 ・夫も義父もいじめはなかったとはっきりではないけれど言っている。いじめは実はあったけれども、夫は強いので跳ね返してきた。
		・自分はアイヌの人に対する関心がとくに強かったわけではないが、夫がアイヌであるということで差別的な扱いを受けたことはある。アイヌの中では「日本人」として差別され、日本人の中では「アイヌの夫がいる女性」として差別される。 ・アイヌ協会の動きは常に必ずフェアなわけではなく、夫は嫌な目にあっている。夫はアイヌ協会に反発した仲間と思われ、逆差別を受けている。
	壮青年	・夫がアイヌであることで、地元の人との関係で大変だったことはとくになかった。鵡川での暮らしは親戚も皆アイヌで何も支障はなくスムーズに入っていけた。 ・アイヌ民族については、意外と働かない人が多いように思う。まじめに働いている人には申し訳ないが、もう少し何か探して働けばいいのにと思うことがある。皆、一生懸命に働き税金を納めて、その税金で食べているのだからもう少し考えてと感じたことは何回かある。
		・何も知らずに結婚して、夫がアイヌなので自分もアイヌ民族のカテゴリーに入るが、単純に「そうなんだ」と思うだけ。夫とアイヌ民族ということに関して、とくに話すことはない。夫はアイヌ民族であることを隠そうともしないし、聞かれれば答えるけれど、アイヌ文化にとくに関心を示していない。 ・自分の周りには、アイヌ民族に対する差別や偏見はまったくない。夫の周りでもそういう差別はないし、差別の話も聞いたことがない。夫から、アイヌであることで苦労したという話を聞いたこともないし、アイヌであることで不快な思いをしたとはとくに聞いていない。テレビなどで見ていると、アイヌの差別の話は聞く。「アイヌです」と言わな

和人妻	壮青年	い方がいいこともあるのかもしれないが、だからといって、アイヌであることを隠すのはさびしいと思う。自分自身はアイヌ民族であることで不利益があったり、偏見を持たれたりしたことはないが、自分から「アイヌですよ」と言ったこともない。 ・結婚している時は、アイヌである夫の実家での生活に慣れていたが、離婚して離れて客観的にみて初めてわかることもあった。その中にいるとわからないが、結婚してすごいところにいたのだと思った。アイヌは言葉や物事、生活そのものが荒いというか大雑把、純粋と言えばとても純粋だが、純粋であるがゆえにやることが逆に見える時があった。離婚してからの方が、アイヌはロシアと交流があったとか、和人に騙されて辛い思いをしたということなどいろいろな知識をもった。 ・結婚していたときは、夫がアイヌで、この人はアイヌだからどうのこうのというより、アイヌが周りにいるのが普通。アイヌと結婚したら、親戚もアイヌだし、アイヌと感じるも感じないも自然にアイヌといるのが普通という生活になっていた。離婚してその生活から離れたので、アイヌをあまり意識して生活はしていない。自身は和人なので意識することはない。 ・差別は昔のように表には出ていないが、隠れているだけで、まだすごくあると思う。表にでない分ある意味陰湿なのかもしれない。今60歳を過ぎた和人は、昔、アイヌは汚いし、努力しないというイメージを強く持っていた。親がアイヌについて家庭で言っている事を子どもは純粋にそのまま受け取って、子どもはアイヌのことを知らないのに、アイヌは汚くてという先入観をもってしまう。 ・自分は宗教にたまたまたずさわり、アイヌの歴史に耳を傾けるようにし始めて、アイヌの人の苦しみを考えてみたら、アイヌに対して否定的なイメージを持つこと自体が恥ずかしいと思う。 ・長女は結婚して子どもが生まれる前に毛深い子が生まれたらどうしようと悩んだ。その時に初めてアイヌが本当は嫌いだったということがわかりショックだった。長女は自信をもってアイヌだと言っていたのではなく、自分を守るために虚勢を張っていただけだ。次女は逆に（アイヌに）興味はないけれど、顔はアイヌの顔に近く、ロシアへ行くなど、アイヌのことに関わる機会がある。 ・アイヌを馬鹿にする人は本当にいて、「アイヌは馬鹿なんだ。あんな踊りなんかして」と言う。「アイヌは和人に騙されたんだよ」と言うと、「騙されるのが悪いでしょ」と普通に言われた。自分がもしアイヌでそんなふうに言われたらと思うと腹が立ったし、アイヌは大変だったろうと思うと、そう言われるのが悔しかった。 ・介護の職場で、私の子どもがアイヌだとわかっていて、アイヌのことをとても悪く言う人がいた。自分の子どもが悪く言われているようで、それだけでも許せないと思ったのだから、アイヌは和人にアイヌ語を禁止され、全部奪われ、馬鹿にされ、土人と言われ、その苦しみはどれほどだっただろうと考えるようになった。アイヌの人の姿は、そういう苦しみを背負って受け継いできている姿だと感じる。 ・ウタリ協会に入り、ウタリの人に（あなたは）ウタリではないからそんなことが言えるんだというように、何も思っていないのに言われることがある。昔いじめられたりしたからだと思うし、いまだに自分の友達でアイヌを馬鹿にする人もいる。またウタリ協会に入っていて、「どこどこのアイヌだ」と言って威張っている人もいる。 ・奨学金の返済義務について問題になっている点で、未返済金の累積が2億円になっているが、返済義務は年収がある程度ある人に生ずるので、アイヌの生活ぶりがよくないから返す義務は生じないというだけなのに、「ウタリは金をもらうだけもらって」みたいな言われ方をするのは聞いていて嫌だと思っている。 ・夫はウタリ協会をアイヌ協会に変えなくてもよかったのではと言っている。ウタリ協会の方がまだ聞こえがいい。 ・アイヌの人たちは人情味があるというか、仲間意識が強いような気がする。ここの地域性かもしれない。ここの部落には、アイヌの人が結構多い。もともと住んでいる人だと、何かあっても助けてくれたりとかが多いような気がする。逆に、他から来た人はちょっと入りづらいかもしれない。 ・夫も夫の父もアイヌの活動には全然興味がないが、夫の祖母は活動していたかもしれない。積極的にではなく、機会があれば活動に参加したいとは思う。引き継いでいきたい人がいれば、やっていったらよいと思う。そして、信用できる人が上に立ったら、夫もついていくと思う。
和人夫	老壮年	・妻はほとんど活動をしておらず、アイヌ民族であることをできるだけ言わないようにしており、アイヌ民族の活動には関わらないようにして生活している。 ・小さい頃から「アイヌ民族のくせにアイヌ語をしらない」と言われ、いじめられていた。さらに和人の自分と結婚したことが加わり、アイヌ民族からも和人からもいじめられたことがあるそうだ。 ・自分自身は和人であるが、（ウタリ）協会のメンバーには同族という見方をされていると感じている。 ・妻の一番下の妹は、結婚のときに民族性が問題になることはなかった。むしろ夫もアイヌ民族に興味を持っている。 ・自分は和人であり、妻がアイヌだからといって、アイヌとしての意識をもつことはない。妻に対してもアイヌと感じることはとくにない。 ・現在仲良くしているアイヌの友達はいる。 ・地域のなかでアイヌとアイヌではない人という差別感はあると思う。自分の世代が差別感のある最後の世代かもしれない。今でも会社でそれほどひどくはないが、何かのきっかけでアイヌ本人には言わなくても、悪口を言うのをたまに聞くことがある。妻からは具体的ではないが、子どもの頃差別はあって、いろいろ言われたり、いじめられたりしたという話は聞いている。 ・妻から具体的にこういう時にアイヌ民族であることを意識すると言う話は聞いたことはないが、アイヌであることは意識していると思う。家では自分以外皆アイヌの血が流れているからアイヌの話はする。特別なきっかけがあるというのではなく、普段の生活から、自分が和人で違うから逆にアイヌの話をするのかもしれない。アイヌ同士の結婚だったら、そういう感覚はないかもしれないし、どう思うのかはわからない。

のダブル・アウトサイダーとは、和人配偶者がアイヌ社会においては和人として退けられ、和人社会においてはアイヌ側の人間として退けられることを意味する。ダブル・アウトサイダーとしての扱いを受けているのは主に和人妻である。「アイヌの中では「日本人」として差別され、日本人の中では「アイヌの夫がいる女性」として差別される」（和人妻・老年）、「（妻は）和人の自分と結婚したことが加わり、アイヌ民族からも和人からもいじめられたことがあるそうだ」（和人夫・老壮年）との言葉がまさにそれを示している。また、「夫が亡くなったら、自分はただのシャモだから、後から入ってきた若い人たちにアイヌ文化関係の団体から抜けるべきではないかと言われた」「国からお金が出るとなると、自分はシャモだから「該当しない」と言われ、デモや署名などで何かで必要な時は頭数に入れられる」（和人妻・老年）、「ウタリ協会に入り、ウタリの人に（あなたは）ウタリではないからそんなことが言えるんだというように、何も思っていないのに言われることがある」（和人妻・壮青年）といったことも、アイヌ社会やアイヌの人々がもつ排他的な一面としてあげられている。

２点目は、和人妻は「和人としての視点」に加えて「アイヌとしての視点」をもっていることである。「自分自身はアイヌの血をひいていなくても、家族がアイヌ民族なので、自分もアイヌ民族の一員だと思っている」（和人妻・老年）、「夫がアイヌなので自分もアイヌ民族のカテゴリーに入るが、単純に「そうなんだ」と思うだけ」（和人妻・壮青年）という発言がある。これはアイデンティティの揺らぎというのではなく、和人とアイヌ両方の視点･立場を自身のなかにもつことで、自分の状況を相対化することを可能にするものである。つまり､社会的にはダブル･アウトサイダーとして扱われることもあるが、内面では、和人とアイヌの両方に包含される存在として自己を認識するのである。

では、なぜ、和人妻なのか。和人夫はアイヌ女性を「嫁にもらう」のであり、嫁が夫の和人文化に適応することは当然とされ、和人夫は基本的に和人の視点で思考し続ける。したがって、「自分は和人であり、妻がアイヌだからといって、アイヌとしての意識を持つことはない」（和人夫・老壮年）。この他、「自分自身は和人であるが、（ウタリ）協会のメンバーには同族という見方をされていると感じている」（和人夫・老壮年）という言葉もあるが、これはアイヌの人々が自分を親しく見ているということであって、本人は和人社会に軸足をおいているとの認識である。

それに対して、和人妻はアイヌ民族の夫と結婚したことをきっかけとして、アイヌ文化に関心をもつようになり、アイヌ社会に適応していく。「アイヌ語を習ったり、刺繍を習ったりしている。編み物もしたし、やれることは一生懸命やっている」（和人妻・老年）、「結婚した後、平取から来ていた友達に誘われウタリ協会に入り、積極的に活動に参加していた。アシリチェップノミにも行っているし、アイヌ文化関係の団体にも入っている」（和人妻・老年）など、積極的に取り組む者も多い。そして、何よりも、「アイヌの血筋の子ども」の母親となることによってアイヌ社会に接近し（接近せざるを得ず）、その過程でアイヌ社会の一員としての意識も強まる（強まらざるを得ない）。その結果、和人としての視点に加えてアイヌとしての視点も身に付けることになると考えられる。母親は子どもの存在を介して異なる文化とつながることができるということだろうか。また、親子の間で民族としてのアイデンティティが異なることを好まない傾向が、父親より母親において強いということかもしれない。和人妻・壮青年の１人は「アイヌの子どもを育ててきて、何も知らないのではいけないと実感しており、アイヌの文化や歴史についてもっと知っておきたい

と思う。アイヌ文化をきちんと知って、アイヌだけではなく和人にも伝えていく役目があると思う。アイヌ文化に対して、アイヌの視点と和人の視点に違いがある」と述べており、責任感あるいは使命感さえうかがわれる。

このような立場からは、アイヌ社会の抱えている様々な問題を批判するだけではなく、その背後にある民族の苦しみの歴史にも心を寄せるような言葉が聞かれる。たとえば、「アイヌのことをとても悪く言う人がいた。自分の子どもが悪く言われているようで、それだけでも許せないと思ったのだから、アイヌは和人にアイヌ語を禁止され、全部奪われ、馬鹿にされ、土人と言われ、その苦しみはどれほどだっただろうと考えるようになった。アイヌの人の姿は、そういう苦しみを背負って受け継いできている姿だと感じる」（和人妻・壮青年）という発言がある。これを述べているのは離婚した元和人妻である。自らの結婚生活がうまく続いているとしても、あるいは、このケースのように離婚することになったとしても、和人妻が「アイヌの血筋の子ども」の母親である限り、アイヌ社会との関係を消すことはできず、「民族」「血」「差別」とは何なのかという問いかけから解放されることはないということだろう。

したがって、アイヌ政策として望むことを問うたときも、和人妻は、和人とアイヌの血をひく子どもがどうすれば幸せになれるのか、という立場をとる。とくに、学校教育への期待は大きい。「小さいときから子どもたちがアイヌ民族はこんなに素晴らしいのだという意識を持つように学校教育を進め、若いうちからアイヌ文化に触れる機会を増やしてほしい」（和人妻・老年）といった意見が多くみられる。「アイヌの人は今まで差別されてきたことから、気持ちのなかに差別されているというのがある。…アイヌ文化をきっちり残しアイヌが自覚して立つことはもちろんだが、アイヌ自身がいじめられてみじめな自分という意識がなくなって、堂々と生きていけるような時代、自分を差別しなくなる時代がくるといいけれど」（和人夫・老壮年）というのが和人配偶者に共通する願いといえよう。この他、アイヌ民族を特別扱いすることは必要なのか、どのようにアイヌ文化を継承させていくか、といった問題意識も強い。

ただ、これらの問題意識は和人配偶者だけのものではなく、むしろ、アイヌ文化やアイヌ民族を相対化し、外からの視点で冷静に方策を語れることが和人配偶者（和人妻）ならではの強みといえる。たとえば、アイヌ協会については、「今は下の者が上の役員に意見を言うと排除されてしまう。今のままだとばらばらになってしまう。…役員、事務局が全部改正されるといい。事実上、今の協会を一度解体して新しい組織として生まれ変わるしかない」（和人妻・老年）、「アイヌの内部分裂をどうにかしなければならないと思う」（和人妻・老年）、「協会の方から、いろいろな面で助けてもらうけれど、逆にそれで他の和人から見て、「別に、もう差別なんてないのに、ずるい。そんなに保護されて」という話も聞いたことがある」（和人妻・壮青年）という発言があり、次世代の教育については、「アイヌも和人も親が認識をもっと変えていかなければならない。アイヌも孤立しているのではなく、視野を広げていく必要があるし、和人の親もアイヌのことはわからないというのではなく、歴史を知って、子どもたちにもっと広い視野でアイヌのことを教えたらよいと思う。親が狭い視野でアイヌはアイヌと教えているのが、子どもを育てていく中でとても嫌だと感じた。もっと広い目でみれば楽しいと思う」（和人妻・壮青年）という言葉が聞かれる（表６－６）。このような指摘は、「和人の視点」と「アイヌの視点」をもつ者だからこそのものであるといえよう。

おわりに

以上、和人配偶者のアイヌ性をみてきた。ダブル・アウトサイダーという語は受動的なイメージを与えるが、そうではない。彼らは、結婚生活においてさまざまな葛藤や悩みに直面しながらも、「アイヌの血筋の子ども」を育てることにより「民族」「血」「差別」について深く考える契機を得て、アイヌ社会と和人社会とを結ぶ重要な役割を果たしてきたといえる。その際、「アイヌの血筋の子ども」の母親である和人妻は、和人夫に比して、アイヌ社会により深く関わっていることが明らかとなった。年代にそってみると、年長世代に比べて若い世代においては、「和人の視点」と「アイヌの視点」というふたつの立場を自覚的に保持しているように思われる。アイヌ民族としての権利を主張すると同時に、「民族」という問題を、日本国内の問題としてではなく、もっと大きな枠組みで考えようとする人々が増えつつあるのではないか。

本章では、和人妻としての特徴、和人夫としての特徴をそれぞれ抽出することを試みたが、今後の課題としては、夫婦や親子を単位としてアイヌ性を探り、家族内のアイヌ性の相違や変容をより実態に即してとらえることが求められる[4)]。

注

1）この他にアイヌ男性と結婚した和人養子（１人）がいるが、アイヌとして育てられたため、本章では検討の対象からはずした。

2）その際、アイヌ社会との距離感は和人配偶者の家庭内で必ずしも共有されているわけではないことにも留意したい。実際に何年も教育資金の援助を受けてきたにもかかわらず、子ども自身は実はそれを嫌がっていたことが後になってわかったという例がある。和人母は「学資資金を借りて長男は大学にいき、そのことについて親子で話したことはなかったが、嫌だったのかな、何かを感じていたのかなとふっと思った」（和人妻･壮青年）と語る。

3）「ダブル・アウトサイダー」という語は、宮西（2008）に倣って使用した。

4）異なる民族間の結婚を取り上げた先行研究が参照可能である。たとえば､Hohmann-Marriott & Amato（2008）は、同じ民族同士のカップルに比較して異なる民族同士のカップルの関係性の質は低下することを指摘し、その理由としては、価値観が共有されていないこと、利用できるソーシャル・サポート源が少ないこと、双方の親からのサポートが十分に得られないことなどをあげている。

参考文献

Hohmann-Marriott, B.E. & P.Amato, 2008,“Relationship Quality in Interethnic Marriages and Cohabitations”, *Social Forces*, 87（2）, 825-55.

宮西香穂里 , 2008,「〈トリプル・アウトサイダー〉を生きる―横須賀米海軍男性と結婚した日本人妻たちの民族誌―」『文化人類学』73（3）, 322-53.

（小野寺理佳）